

年間を通した「要旨をとらえ、自分の考えを明確にする」国語科の学習指導 ～「新聞を活用した」学習活動を通して～

教諭 重永 美津子

1 はじめに

第5学年及び第6学年の「C読むこと」の目標に「目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。」とある。そこで、今年度、第5学年の担任であることから、年度当初に「要旨をとらえること」と「筆者の考えに対する自分の考えを明確にすること」の二つの力を児童に付けていくことを確認した。

そのためには、年間を見通して「継続した取り組み」が必要だと感じ、「新聞を活用した学習活動」を通して、「要旨のとらえ方」や「要旨に対する自分の意見をもつこと」を系統立てて学習していくように計画し、実践していった。

具体的には、前の単元で付けた力を次の単元へと活用していけるように、年間を通して「新聞を読もうⅠ」から「新聞を読もうⅣ」まで4つの単元を設定していった。

なお、授業づくり拠点校（活用力向上研究事業）研修会での公開授業は、「新聞を読もうⅢ」のうちの1時間であり、「新聞を読もうⅠ」、「新聞を読もうⅡ」で付けた力を活用して学習していくものであり、「新聞を読もうⅣ」につなぐものでもあった。それらのつながりを以下の図1に示した。

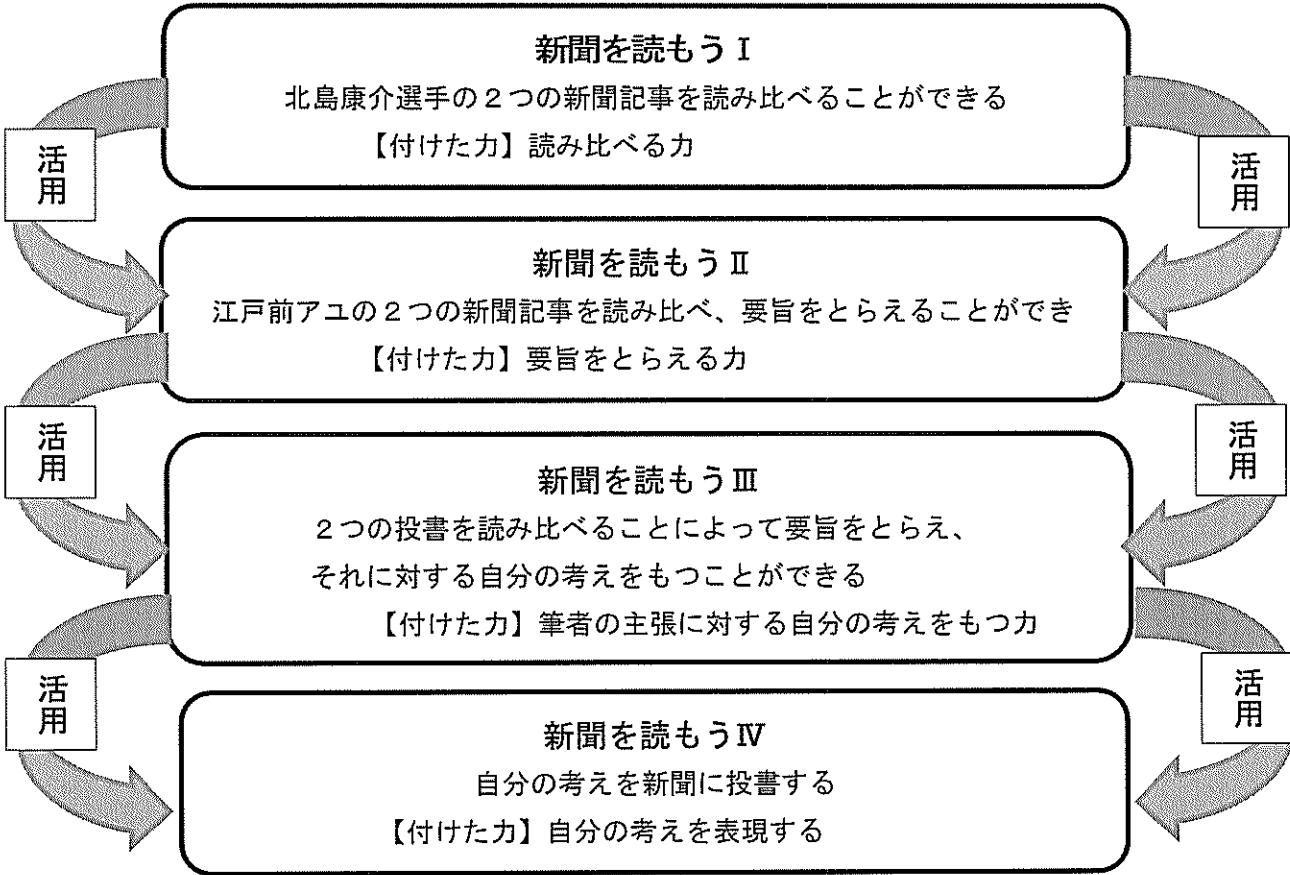


図1 年間を通した「新聞を活用した」単元をつながり

2 「新聞を活用した」学習活動について

年間を通して「要旨をとらえ、自分の考えを明確にする」ことを目的として指導をする際に、手段として様々な「活動」を取り入れ実践してきたが、中でも「新聞を活用した活動」を中心となる軸の活動にした。

その理由は、三つある。

一つめは、今年度明倫小学校には、4社の新聞社から毎朝、新聞が寄贈されている。せつかくのこの機会を学習に生かせないものかと考えたからである。

二つめは、新聞記事は、比較的文章が短く、一文も短い。文末表現も、「事実」と「意見や感想」とに分けやすく、筆者の伝えたいこと（要旨）をとらえやすいと考えたからである。

三つめは、新聞記事で要旨をとらえる学習をくり返すことで、要旨のとらえ方が身に付き、それが教科書の説明的な文章での要旨をとらえる学習に活用できると考えたからである。

以上のような理由から、年間を通して新聞を活用するという「軸となる活動」を仕組んだことで、児童にも学習の見通しをもたせ、主体的な活動へとつなげることができた。

しかし、4月当初、高学年になったばかりの児童にとっては、「新聞を読むこと」自体にかなりの抵抗があった。そこで、まずは「新聞記事を読むことに慣れる活動」が必要と考え、日々の活動の中で、新聞記事を積極的に読み、感想交流する機会を取り入れていった。感想交流の方法としては、感想を書いたものをお互いに読み合い、気づきを書き合うという方法を取り入れ、感想を書いたシートは、教室の後ろにあるファイルに閉じ、いつでも誰でも読める状態にした。(図2)児童がどのようにシートに感想や意見を書いているのかを図3に示した。



図2 新聞記事に対する意見や感想を書いたファイル

十一月 十五日(金)の新聞から
題名を見たときに、私にも当てはま
るなと正直思った。なので、外国の友人
が言うことを分からなくはない。そして
西村さんの気持ちも分かるつもりだ。
読んでいて、ポーランド人の友人が言
た言葉は、なんだが間違ったことに
思えてきた。だって下を向いている
のは、全員ではないし、ちゃんとやる
人もいるからだ。
では、私はどちらなのかわかん
今のままでは、下を向いている人
ちかいと思ってるのでこの記事は、
今後の私をかえる第一歩だったと
は、もっと思ってた。

図3 児童の書いた感想や意見

3 年間を通した「要旨をとらえ、自分の考えを明確にしよう」の学習指導について

「要旨をとらえ、自分の考えを明確にしよう」という年間を通じての目標達成のために、以下のような単元を系統的に仕組んでいった。(公開授業は、「新聞を読もうⅢ」)
次の表1に、それぞれの単元の概要をまとめてみた。

表1 3つの単元の概要

単元名	新聞を読もうⅠ 北島康介選手の新聞記事	新聞を読もうⅡ 江戸前アユの新聞記事	新聞を読もうⅢ 投書
単元目標	読み比べることができる	要旨をとらえることができる	要旨をとらえ、それに対する自分の考えをもつことができる
学習の とらえ方	<ul style="list-style-type: none"> ① 目的に応じて新聞記事を工夫して読むことができる児童は少ない。 ② 要旨のとらえ方を知り、複数の記事を読み比べる意味や効果について考えることができる。 ③ 的確に要旨をとらえ、読み方の工夫ができる児童を育てたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 四月当初に比べて、新聞記事を工夫して読むことができる児童が増えつつある。 ② 記事を読み比べることによって、要旨がとらえやすくなる。 ③ 的確に要旨をとらえ、読み方の工夫ができる児童を育てたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 投書にも興味をもって読み始めている児童が増えつつある。 ② 投書を読み比べることによって、要旨がとらえやすくなる。 ③ 要旨を的確にとらえ、それに対する自分の意見をもつことができる児童を育てたい。
学習計画	<ul style="list-style-type: none"> ① 新聞記事についての経験を振り返り、単元の学習課題「二つの記事を読み比べよう」を設定する。 ② 新聞記事の特徴や構成要素について知り、要旨をとらえる。 ③ 二つの記事を読み比べ、記事内容の違いの意味や効果を考える。 ④ 単元の学習課題に対するまとめをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 新聞記事についての既習の内容を振り返り、単元の学習課題「筆者の伝えたいことをより明確にとらえよう」を設定する。 ② 新聞記事の特徴や構成要素について復習する。 ③ 二つの記事を読み比べて、要旨の違いを明確にする。 ④ 単元の学習課題に対するまとめをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 新聞記事についての学習を振り返り、単元の学習課題「筆者の伝えたいことをより明確にとらえ、それに対する自分の考えをもとう」を設定する。 ② 「投書」とは何かを知り、投書(意見文)の特徴を知る。 ③ 二つの投書を読み比べて要旨の違いを明確にし、自分の考えをもつ。 ④ 単元の学習課題に対するまとめをする。

(1) 「新聞を読もうⅠ」(北島康介選手の新聞記事)について

教材は、光村図書に掲載されている2社の朝刊の記事である。北島康介選手が、北京オリンピック男子百メートル平泳ぎの準決勝で全体2位のタイムだったことを伝える2社の朝刊を見出しや写真を手がかりに読み比べていった。

この単元では、主として「読み比べる力」をつけることをねらいとしていたために、「読み比べた」からこそ、共通点や相違点が浮き彫りになるといったものの考え方の意味や効果を児童が実感できたことが大きな成果であった。

また、見出しや写真、そして逆三角形の構成から、要旨をとらえていくという「要旨のとらえ方」を明確にすることができ、「新聞を読もうⅡ」につなげていくことができた。(図4)

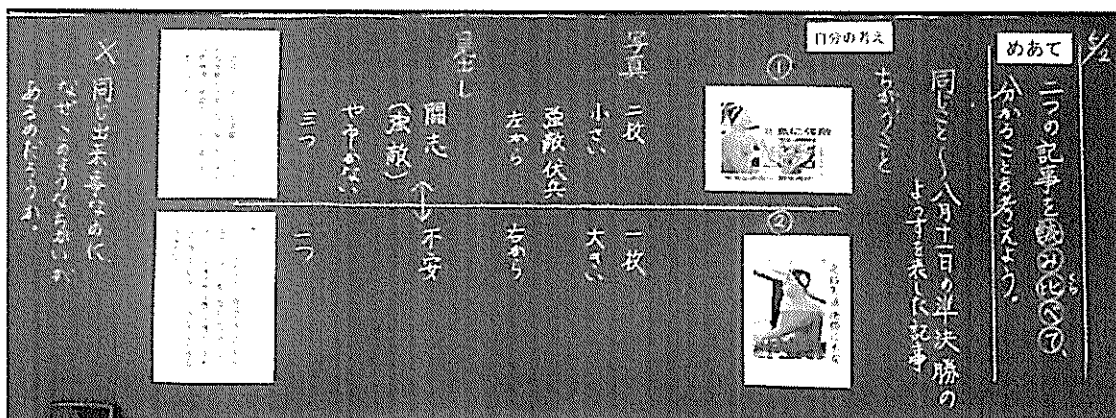


図4 「新聞を読もうⅠ」の板書

(2) 「新聞を読もうⅡ」(江戸前アユの新聞記事)について

教材は、東京書籍に掲載されている、いずれも江戸前アユについて書かれた2社の記事である。A社とB社の記事内容が違うのは、筆者の伝えたいこと(要旨)が異なるからであることを「新聞を読もうⅠ」で学習したので、ここでは、「要旨を明確にとらえる」ことをねらいとして2つの記事を読み比べていった。

読み比べるときの観点は、「大見出し」、「中見出し」、「リード文」、「写真」とし、それらの中の「どの言葉から、このようなことが伝わる」というように発表の仕方を示したことで、2つの記事の違いがより明確になった。

また、要旨をとらえるときに、「100字以内にまとめる」と条件を示したことで「A社の伝えたいことは、〇〇ということ」と書き方を示したことで、より明確に要旨をとらえることができた。(図5)

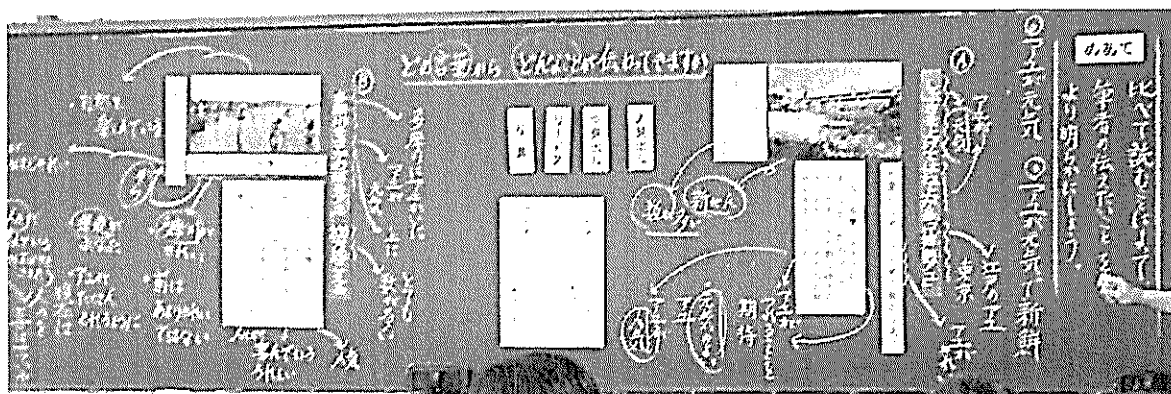


図5 「新聞を読もうⅡ」の板書

(3) 「新聞を読もうⅢ」(スポーツについての投書について)

教材は、東京書籍に掲載されている、いずれもスポーツについて書かれた2つの投書である。以下のものは、公開授業時の指導案である。

第5学年 国語科学習指導案

指導者 重永 美津子

1 単元 新聞の投書を読み比べよう(新聞記事を読もうⅢ)

2 指導の立場

- (1) 新聞には、いろいろな種類の記事があることに気づき、投書にも興味をもって読み始めている児童が増えつつある。
- (2) 投書を読み比べることによって、要旨がとらえやすくなる。
- (3) 要旨を的確にとらえ、それに対する自分の意見をもつことができる児童を育てたい。

3 単元目標

要旨を的確にとらえ、それに対する自分の意見をもつことができる。

4 学習計画(全5時間)

- (1) 新聞記事についてのこれまでの学習を振り返り、単元の学習課題「筆者の伝えたいことをより明確にとらえ、それに対する自分の考えをもとう」を設定する。 1時間
- (2) 「投書」とは何かを知り、投書(意見文)の特徴を知る。 2時間
- (3) 二つの投書を読み比べて、要旨の違いを明確にする。 1時間(本時)
- (4) 要旨に対する自分の意見をもち、単元の学習課題に対するまとめをする。 1時間

5 本時の学習指導

- (1) 主眼
投書を読み比べることによって、要旨の違いを明確にすることができる。
- (2) 準備
学習プリント、学習計画表
- (3) 学習の展開

学習活動・学習内容	教師の働きかけ
① 既習の学習を振り返る。 〈3分〉 ・投書(意見文)の構成	① 前時の投書の構成を文章内容を確認しながら振り返り、本時に提示する投書の構成への布石を打つ。
② 本時のめあてを知る。 〈2分〉	② 既習内容から、見出しは筆者の一番伝えたいことを短くまとめたものであることを確認する。
二つの投書を読み比べて要旨をとらえ、見出しをつけよう。	
③ 二つの投書を読み比べる。 〈15分〉 ・投書の構成(意見文の構成)	③ 二つの投書の構成が同じであることに気づくことができるように、段落ごとに色分けをしておき、2段落と6段落に筆者の主張(要旨)が書かれていることを確認する。
④ 見出しをつけ、友達と読み合う。 〈20分〉 ・要旨をとらえること ・見出しのつけ方	④ 見出しをつける際には、本文中の言葉をできるだけ活用することや二つの見出しが対称的になることなどの声かけをしておく。 お互いを見出しを読み合い、一番ふさわしい見出しを選ぶ際には、その理由をはっきりさせることによって、要旨をより明確にとらえることができるようにする。
⑤ 本時の学習をまとめる。 〈5分〉 ・投書(意見文)の構成 ・2つの要旨の違い ・今後の学習の見通し	⑤ 文章構成や要旨のとらえ方、見出しのつけ方等本時での学びをまとめ、一人ひとりに振り返りの時間をもたせる。

「新聞を読もうⅢ」では、「新聞を読もうⅠ」でつけた「読み比べる力」と「新聞を読もうⅡ」でつけた「要旨をとらえる力」とを活用し、さらに「筆者の主張に対する自分の考えがもてる力」をつけることをねらいとした。

筆者の主張に対する自分の考えをもつためには、まずは、筆者の主張を明確にとらえることが必要であり、そのために必要な力をそれまでの単元で付け、本単元では、その力を「見出しを付ける」活動を通して再確認することとした。見出しについては、「筆者の主張を短くしたもの」と定義し、定義に従って付けていった。(図6)

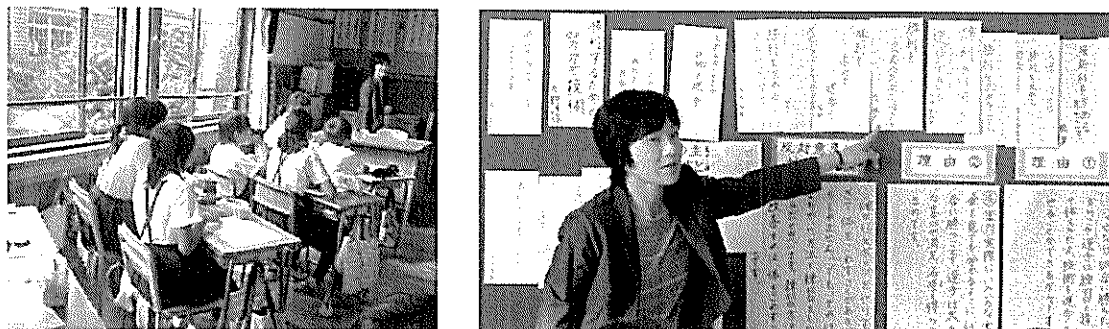


図6 自分の見出しを読んでいるところ

筆者の主張に対する自分の考えをもつことにおいては、「あなたは、どちらの考えに近いですか。」という問いに対する答えから書いていくように指示し、その理由を自分の体験からも書き加えていくようにさせた。(図7)

私	は	、	加	東	さ	ん	と	千	野	さ	ん	の	意	見	と	ど	ち	ら		
も	近	い	け	れ	ど	、	ど	の	り	が	と	い	う	と	千	野	さ	ん		
の	意	見	に	近	い	と	思	い	ま	す	。理	由	は	、	私	も	勝	利		
を	求	め	り	た	け	れ	ば	人	は	努	力	を	し	な	い	と	思	い		
ま	す	。で	も	、	勝	つ	た	め	だ	け	に	行	く	こ	と	は	な	い		
と	思	い	ま	す	。仲	間	と	協	力	し	、	楽	し	く	せ	ね	は	い		
と	思	い	ま	す	。私	も	、	元	々	野	球	を	し	て	い	て	、	ク	ラ	
を	行	回	り	し	た	け	ど	、	そ	れ	は	自	分	自	身	が	し	、	ケ	リ
し	て	い	ま	す	。加	東	さ	ん	の	意	見	と	私	の	意	見	と	ど	ち	
ら	の	よ	う	に	、	ひ	じ	や	分	を	と	わ	ず	か	も	し	れ	ま	せ	
な	い	と	思	い	ま	す	。人	が	、	け	が	ま	お	そ	れ	を	い	ら	と	け
の	と	け	が	を	お	そ	れ	を	い	ら	と	け	が	の	も	と	に	な	ら	
る	の	と	け	が	を	お	そ	れ	を	い	ら	と	け	が	の	も	と	に	な	
ら	の	よ	う	に	、	ひ	じ	や	分	を	と	わ	ず	か	も	し	れ	ま	せ	
な	い	と	思	い	ま	す	。勝	つ	た	め	と	う	と	い	う	交	換	が	な	
い	ま	す	。勝	つ	た	め	に	人	は	努	力	を	し	な	い	と	思	い		
ま	す	。勝	つ	た	め	に	人	は	努	力	を	し	な	い	と	思	い	ま		
す	。勝	つ	た	め	に	人	は	努	力	を	し	な	い	と	思	い	ま	す		

図7 筆者の主張に対する自分の考え

4 おわりに

「活用力」を付けるためのキーワードを私は、「付けたい力の明確化」と「学びの継続」と考えている。まずは、「活用したい力」つまり、「付けたい力」を明確にすること。その後、「付けたい力」をくり返し活用できる「継続した取り組み」が必要だと考えている。年間を通して「新聞を読もうⅠ」から「新聞を読もうⅣ」まで「継続した取り組み」を行うことによって、付けたい力が少しずつではあるが、着実に付いていく手応えを今、感じている。

今後は、子どもたちが全く新しい新聞記事に出合ったときに、今回学習してきた読み取り方を活用して自分の力で新聞記事を読み、自分の考えを広げたり深めたりしてくれるだろうことを私は、期待している。